

事例研究報告

特別支援学校高等部の生徒のこだわり行動 「紙破り」への介入

生徒の実態

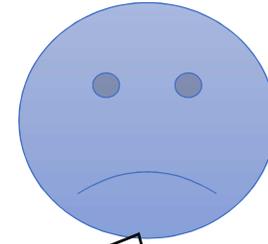
高等部

- ・ 平仮名，片仮名の文字スケジュールをもとに活動する。
- ・ 生活場面での簡単な口答指示が理解できる。
- ・ いくつかの自発的な発語がある。
- ・ 衝動性，多動性が非常に強く，危険の認識は弱い。
- ・ こだわりの強さと多様さが顕著である。
- ・ こたわることへの静止で，他害や自傷が見られることがある。
- ・ 体格がよく力も強いいため，教員1人での制止が難しい。
- ・ 発達年齢 2歳8ヶ月

<紙破り>

入学前から何年も続いており，感覚刺激への入力が強化され続けてきたと考えられる。大人達のわずかな隙をみて紙に飛びついていくことが多い。その際，破っても大人は気付いていないと思っている様子が見られることがある。

保護者の願い



重要書類，領収書，紙幣，書籍，新聞などを破られ，生活に影響が出る状況が何年も続いている。

紙類を全て隠すことには限界があり，非常に困っている。

たくさんある「こだわり」の中でも，優先的に指導し，減らして欲しい行動である。

教員の願い

環境調整として、大事なものは、隠す、ラミネートする、テープで4辺を覆う、教員に広く協力を求めるなどの環境調整を続けてきたが、多くの時間と手間を要する。

掲示作品、ポスター、書類、学習プリント、連絡帳、ノートなど、学校は、紙の環境であふれており、全ての紙に対応することは難しい。

「紙破り」を減らすことで、集団へのよりスムーズな参加や緊張感なく活動範囲を広げることが可能になると考える。

考えられる紙破りの機能

① 感覚刺激が欲しいとき

② わずかな待ち時間

③ ストレスを感じたとき

④ 注目が欲しいとき

(機能が高いと考えられる順)

アドバイザーからの助言

- ①小刻みに感覚刺激入れ，刺激が途絶えないようにしましょう。
- ②わかりやすい手がかりで，破ってよいものといけないものの区別を練習しましょう。

継続指導を確認した事項

- ・感覚刺激の種類分散
複数の感覚刺激の入力により，紙へのこだわりを弱める。
- ・好子の出現と消失を明確にするほか、タイムアウトもあわせて使い対応する。
- ・こだわり以外でできることを増やし，全般的な成長を促す。

指導1:小刻みに感覚刺激を入れる

一日ごとの肯定的な「紙破り」の回数

スケジュールへ組み込み回数 + 紙破り要求回数

<4月～7月> 2～3回／日

<9月以降> 5～8回／日

一度に破る紙量には、だいたいの目安を作るが、回数は制限していない。要求すればその度、破る紙が得られることを理解していった。

指導2 弁別ルール学習

- ・10月5日～ 色分けでの弁別開始

黄ラインのかご・黄テープを貼った掲示物→○

赤ラインのかご・赤テープを貼った掲示物→×

(破り可：○ 破り不可：×)

- ・10月7日以降，確実な弁別ができるようになり，赤ラインのかごと，赤テープの貼られている掲示物はほぼ破らなくなる。

弁別の手がかりのフェイドアウト (般化の際の効率化のため)

表情カード, 好子・ペナルティーの絵カードを, 順次フェイドアウトした。
現在, かごの弁別はテープだけで, 掲示物には弁別テープも貼っていない。

「かご」での仕分け

破りを許可する紙
(黄色テープ)



許可しない紙
(赤テープ)





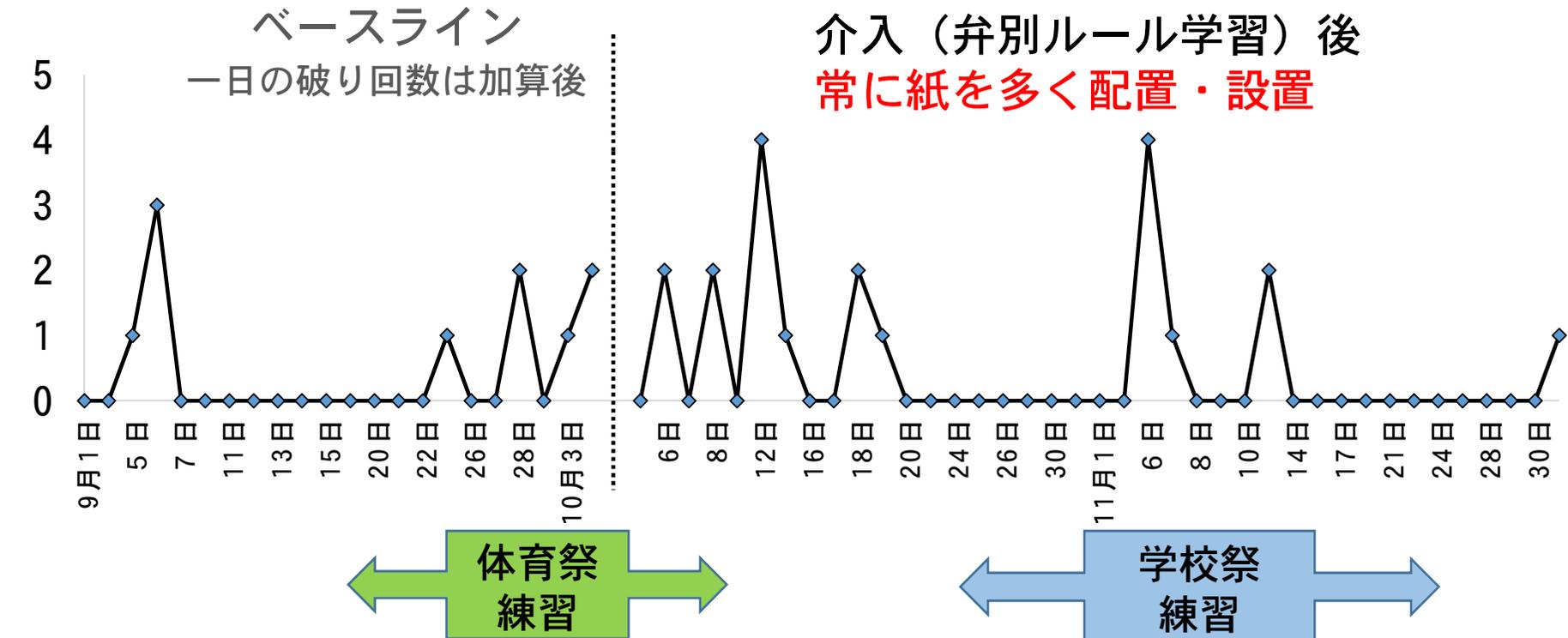
領収証等、ワークブック等を「破ってはいけないもの」の赤いかごに入れることで、日常生活全般で破ってはいけないものの弁別や衝動性のコントロールに結びつける。

弁別ルール理解後に意図的に破った際には、教員間の共通理解のもとにペナルティーを与えたり、タイムアウトを実施した。守れた時には、賞賛とともに好子を用意した。

指導の成果

弁別ルール学習前後の紙破り回数

枚数



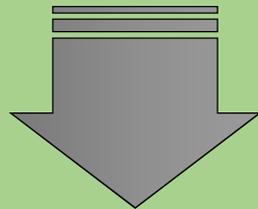
行事の時期が続き、プログラム、練習内容、並び順、スケジュール、台本などの紙媒体を持ち歩く人や掲示物が一気に増えた。同時期に「紙破りの弁別学習」も始まり、7月までより明らかに多量の紙に手が届く状況になった。

しかし、10月下旬頃から破りを我慢する様子がそれまでより多く見られるようになった。紙破りは、クラス担任以外の教員の前で起こることが多かったが指導方法を共通理解する中で減少していった。

指導の成果～具体例～

11月下旬頃より破らなくなったもの

- ・友達が持ち歩いている紙ファイル, 漢字ノート, プリント類
- ・弁別テープを貼らずに掲示したクラスと前の廊下の掲示物
- ・机を向きあわせに並べた状態で配布した学習プリント
- ・友達の机の上に置きっ放しのプリントなど



- プリントや掲示物にラミネートが不要なくなった。
- 書字活動の際にパーテーションで仕切る必要がなくなった。
- 連絡帳を自分で提出できるようになった。
- 活動範囲が広がった。
- 教員の紙にかかわる緊張感が緩和された。

指導の成果 ～学校外～

12月の自宅でのエピソード

- ・母親がテーブルに置き忘れていた書類の袋の顔マークを見て、「あかんよ」といいながら数日間、破らなかった。

1月の病院受診の際のエピソード

- ・約90分間、紙を使った発達検査を破らずに受けることができた。
- ・ドクターの診察場面で、落ち着いて座っていられた。
- ・待合室で、患者さんのカルテに飛びつかなくなった。
- ・廊下を移動中に、掲示物(ポスター等)を破らなかった。

放課後等デイサービスにおいて

- ・フツと破ってしまうこともあるが、紙破り回数は減っている。

成功のポイント

- ・紙の供給量や破りが許可される回数が増えたことで、本人の中で「紙」が「大人の目を盗んででも手に入れなければならない価値あるもの」という思いが薄れたこと。
- ・弁別のルールを学習し、破りの可否を選択していく中で、衝動的に破るのではなく、一瞬であっても逡巡してから紙に手を伸ばす習慣が身についたこと。
- ・正しい選択の時に賞賛され、要求すれば快く紙を与えられることで、精神的・感覚的に満たされる部分が増したこと。
- ・行動の結果の好子の出現と消失に例外をつくらなかったこと。